山東町埋蔵文化財調査報告書 Ⅲ

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

法　泉　寺　遺　跡

小　倉　山　遺　跡

しょうけ塚遺跡

序

小倉山遺跡については、こんな思い出があります。もう30年以上も前のことです。丘頂にある毘沙門堂を訪ねたとき「ここは古墳だ」とか「廃寺跡だ」とか聞きましたので、〝ひょっとしたら……〟との思いが起こり、周辺を歩いてみました。たしか、お堂の西側の一段低くなった茂みの中でした。布目がはっきりしていて厚さ2㎝もある瓦片を見つけて掘り出しました。当時は、今のように埋蔵文化財に対する関心が高くはありませんでした。近くの小学校へ立寄って「そこの小倉山で見つけました。子どもさんの社会科の学習に役立ちませんか。」と応待の先生に預けて帰りました。

今回、この「小倉山遺跡の調査をする」と聞いて、このことを思い出し、胸の高鳴りを覚えました。しかし、今回の調査は本報告書のとおり、二遺跡とも現状保存を主体として限られた区域の試掘程度にとどめましたので、その全容を知ることはできませんでした。

でも、どの遺跡からも、遺物、遺構が見つかり、伝承や先人の研究の裏付けはできました。わたしたちの祖先の生き様については、ここでも、また多くの謎を残したままとなりました。

その謎解きは今後の研究に待たなければなりませんが、この地域にも、人々の定住が古くからであることがわかりました。

人工衛星が空を飛び交い、航空網はいよいよ整備されて、人々の関心は、空へ空へと高まっている現今ですが、古代の人々の語りかけは、まだまだ地中深いところから続けられています。

遺跡、史蹟を大切にしたいとの思いが、ますますつのります。

本調査に御協力くださいました皆さん、ありがとうございました。心から感謝申し上げます。と共に、本報告書が、人々の埋蔵文化財への関心を高めてくれることを、そして、斯界の研究進展のため役立ってくれるようにと祈ります。

昭和62年３月

山東町教育委員会

教育長　西　秋　良　策

例　　言

1．本報告は、山東町における昭和61年度県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果である。

2．調査は、滋賀県教育委員会の依頼にもとずき、山東町教育委員会社会教育課が実施した。

3．本書には、坂田郡山東町法泉寺遺跡、小倉山遺跡、しょうけ塚遺跡の３遺跡を収載した。

4．調査・整理には、林　孝好・鵜野浩司・長野忠義・中嶋一人・田中糞次・安田正浩・武立信明・川幡浩之の諸君、西川久雄・岡野庄七・高畑善吉・高畑桐吾・高畑秀一・高畑登代・平井はま子・前川トシエ・田中司麻雄・中島国栄の諸氏が参加した。また、谷口千夏・谷沢稚香子・高畑真由美の協力を得た。遺物写真については、寿福　滋氏(寿福写房)を煩わした。記して感謝の意を表したい。

5．調査及び本書の作製については、山東町教育委員会社会教育課主事　桂田峰男が担当した。

目　　次

序

例　言

（目次・挿図目次・図版目次）

1．坂田郡山東町法泉寺遺跡

Ⅰ．はじめに …… 1

Ⅱ．位置と環境 …… 1

Ⅲ．検出遺構 …… 3

Ⅳ．出土遺物 …… 9

Ⅴ．おわりに …… 19

2．坂田郡山東町小倉山遺跡・しょうけ塚遺跡

Ⅰ．はじめに …… 20

Ⅱ．位置と環境 …… 20

Ⅲ．調査の結果 …… 22

1．層位と遺構

2．出土遺物

Ⅳ．おわりに …… 26

挿　図　目　次

図１　調査地周辺図

１．法泉寺遺跡

図２　トレンチ設定図 …… 2

図３　T－１～４トレンチ遺構図 …… 4

図４　T－５トレンチ遺構図 …… 5

図５　T－１～５トレンチ断面図 …… 7

図６　出土遺物実測図 …… 13

図７　〃 …… 14

図８　〃 …… 15

図９　〃 …… 16

図10　〃 …… 17

図11　〃 …… 18

２．小倉山遺跡・しょうけ塚遺跡

図12　トレンチ設定図 …… 21

図13　T－２トレンチ遺構図及びT－１～３トレンチ断面図 …… 23

図14　出土遺物実測図 …… 24

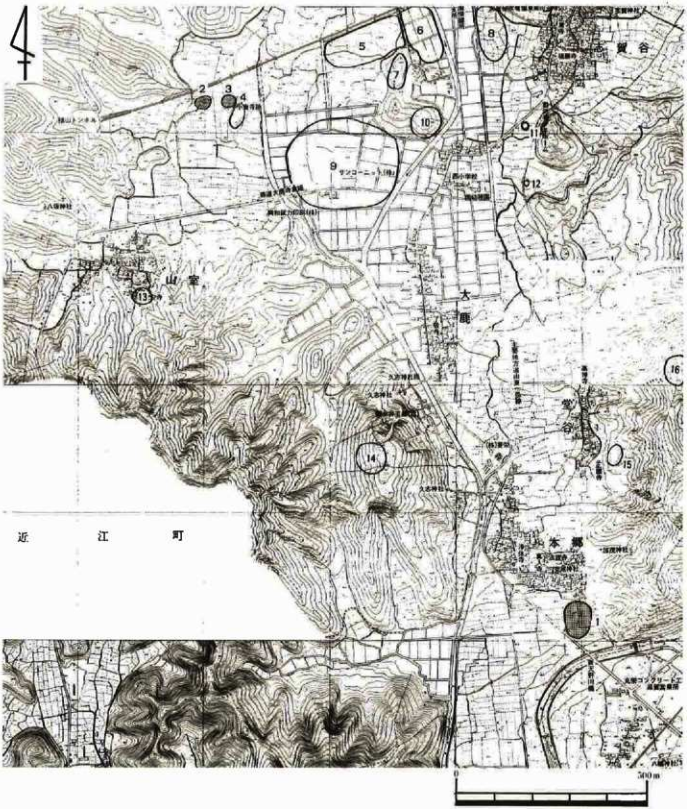
図　版　目　次

1．法泉寺遺跡

図　版　一	調査地遠景
	T－3トレンチ（北から）
図　版　二	T－5トレンチ（北から）
	T－5トレンチ（北から）
図　版　三	T－5トレンチ遺物出土状況
	T－5トレンチ遺物出土状況
図　版　四	T－5トレンチ遺物出土状況
	T－5トレンチ　SX－05
図　版　五	出　土　遺　物
図　版　六	出　土　遺　物
図　版　七	出　土　遺　物
図　版　八	出　土　遺　物

2．小倉山遺跡・しょうけ塚遺跡

図　版　一	調査地遠景（北西から）
	T－1トレンチ（西から）
図　版　二	T－2トレンチ（西から）
	出　土　遺　物



1.法泉寺遺跡　2.しょうけ塚遺跡　3.小倉山古墳　4.小倉寺遺跡
5.箕原遺跡　6.北方田中遺跡　7.鄙第山古墳　8.西代遺跡
9.大鹿遺跡　10.道照寺遺跡　11.引塚遺跡　12.馬塚古墳
13.宝安寺遺跡　14.堂谷西の砦遺跡　15.極楽寺遺跡　16.堂谷東の砦遺跡

図1　調査地周辺図

1．坂田郡山東町法泉寺遺跡

Ⅰ．は　じ　め　に

本報告は、県営ほ場整備事業に伴う法泉寺遺跡の埋蔵文化財発掘調査にかかるものである。

法泉寺遺跡は、山東町の南西部大字本郷地先に所在し、従来から周知されていた遺跡である。

昭和61年４月、滋賀県農林部より県営ほ場整備事業について、埋蔵文化財の有無等につき照合がなされ。滋賀県教育委員会からの調査依頼により、同年４月山東町教育委員会が試掘調査を実施した。

その結果、いくつかの試掘トレンチにおいて柱跡が検出され集落跡の存在が明らかになった為、同年４月から、本教育委員会において発掘調査を実施することとした。

現地調査は、昭和61年４月26日から同年７月30日までとし、以後は出土資料の整理調査を実施した。

調査面積は、約 1,200㎡（他、設計変更約 2,000㎡）であった。

Ⅱ．位　置　と　環　境

今回の調査地は、坂田郡山東町本郷の南地先に所在している。この地は山東町の南西端に位置しており、地目はほとんどが水田で、現在の標高は122.9ｍ～124.9ｍ付近であり、わずかに起伏をもつものである。

調査地の立地する山東町の南西端は、東に大字長岡との境界となる低小丘陵が連なり、西に近江町との境をなす低丘陵を有し、この両丘陵に挟まれた形で微高地を形成する。また、この微高地西端を黒田川が南流し、山東町柏原に起源をもつ天野川が南部を西流して黒田川と合流する。複雑な地形を呈し、面積的に狭小なこの地ではあるが、これら両河川の恩恵をうけて肥沃な沖積地を形成している。この両河川の恩恵をうけた沖積地には、居住・農耕に最適の地として古くから開拓が進み、多くの集落が営まれていたのである。このことを裏付けるかのように両河川沿いには多くの遺跡が点在する。

黒田川については、上向川遺跡・北方田中遺跡・笹原遺跡・横山城などが点在する。

天野川では、葉広遺跡・御墓遺跡・杉の木遺跡・大野木館跡などが点在し、御墓遺跡では明治39年に打製石鏃が発見されており、また、昭和55年の団体営ほ場整備事業に伴う調査で、弥生式土器が出土している。[①] そして、今回の法泉寺遺跡もこの両河川沿いに所在する遺跡の１つである。

本遺跡周辺では、従来より瓦片、須恵器片などが散布し、また『坂田郡志』には、

『往昔、天台宗にして、天王山天徳院法泉寺と号し、七堂伽藍のありし霊場なり。此寺は黒田氏の菩提所なりしも天正年間兵火に罹り、宏大の堂宇も鳥有に帰し、古記録並に器物皆焼失するに至れり。』

と書かれており、これら文献・伝承を裏付けられる調査が期待される。

註①『坂田郡山東町内遺跡詳細分布調査報告書』山東町教育委員会・㈳滋賀県文化財保護協会　1986.3

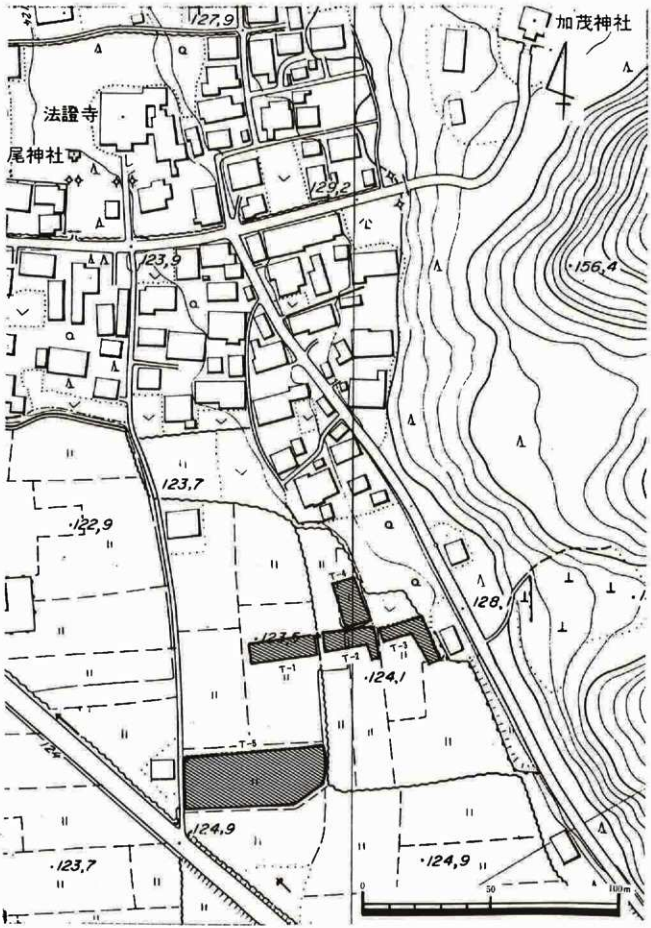

加茂神社
法證寺
尾神社
127.9
129.2
123.9
156.4
123.7
122.9
128.1
T-1
T-2
T-3
T-4
124.1
124.9
123.7
124.9
0
50
100m

図2．トレンチ設定図

Ⅲ．検　出　遺　構

今回の調査において検出された遺構は、掘立柱建物跡８棟、柵跡１列、溝跡１条、性格不詳遺構などの他、多数の柱穴が検出された。

１．掘立柱建物跡

掘立柱建物跡として確認し得たのは、８棟（ＳＢ—01～08）であったが、柱穴の遺存状況からまだ多数の建物跡が存在していたことは想像に難くない。これらの建物跡は、方位などから大きく３群に分けられる。最初の一群は、真北・やや北東～南西に方位を保つ一群 ＳＢ—04・05・07・08 である。次はＮ—20°～30°—Ｗ前後を計るＳＢ—02・03である。そして、東西（西東）に方位を保つ一群 ＳＢ—01・06 である。

〔ＳＢ—01〕

Ｔ—２トレンチ西側で検出されたＮ—96°—Ｗの方位を保つ建物跡である。南東部過半がトレンチ外へ伸びるため規模は不明である。桁行２間以上（4.5m）、梁行１間以上（2.2m）を数える。掘り方は、0.4m～0.6mで楕円形・隅丸方形などを呈しており、必ずしも一定していない。柱筋は比較的通っており、柱間は、桁行が西から2.5・2.0m、梁行が北から2.2mである。

〔ＳＢ—02〕

Ｔ—３トレンチ東側で検出されたＮ—31°—Ｗの方位を保つ。柱列は３間以上（4.6m）を計る。掘り方は、0.4m～0.8mで楕円形・隅丸方形を呈している。柱筋は非常によく通っており、柱間は、南より1.5・1.6・1.5mとよく揃っている。この柱列は、トレンチの幅が狭く大半がトレンチ外に伸びており規模が不明であるので、建物跡なのか柵跡であるのか断定しかねるものである。しかし、柵跡としては柱穴長径が大きいことから建物跡の柱列と考え記載した。

〔ＳＢ—03〕

Ｔ—４トレンチ南端で検出されたＮ—15°—Ｗの方位を保つ建物跡である。南部過半がトレンチ外へ伸びるため規模は不明である。桁行２間以上（1.7m）、梁行１間（3.2m）を計る。掘り方は0.4m～0.6mで円形を基調としているが、隅丸方形を呈するものもある。柱筋はよく通っており、柱間は桁行が北から0.8・0.9m、梁行が東から3.2mである。

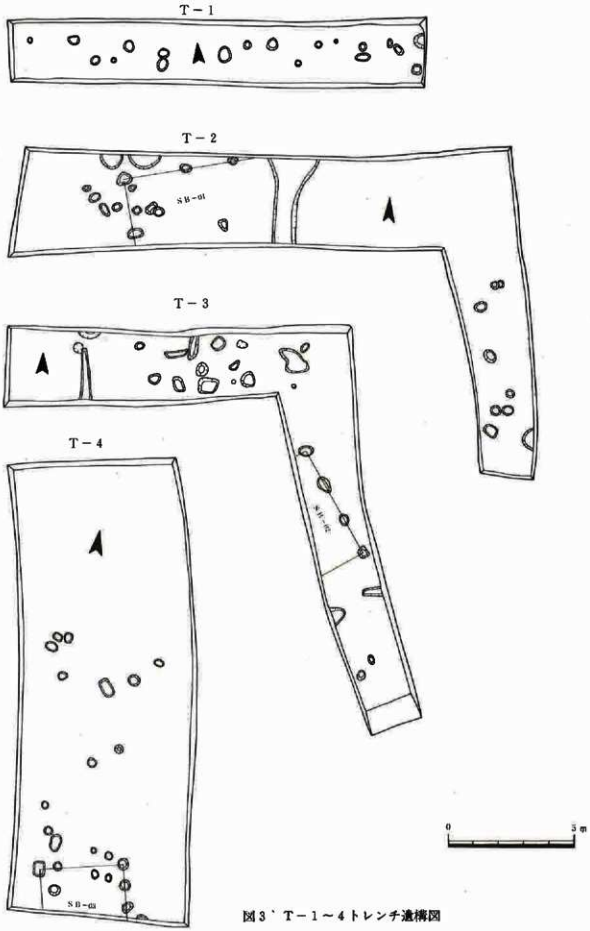


図3 ` T－1～4トレンチ遺構図

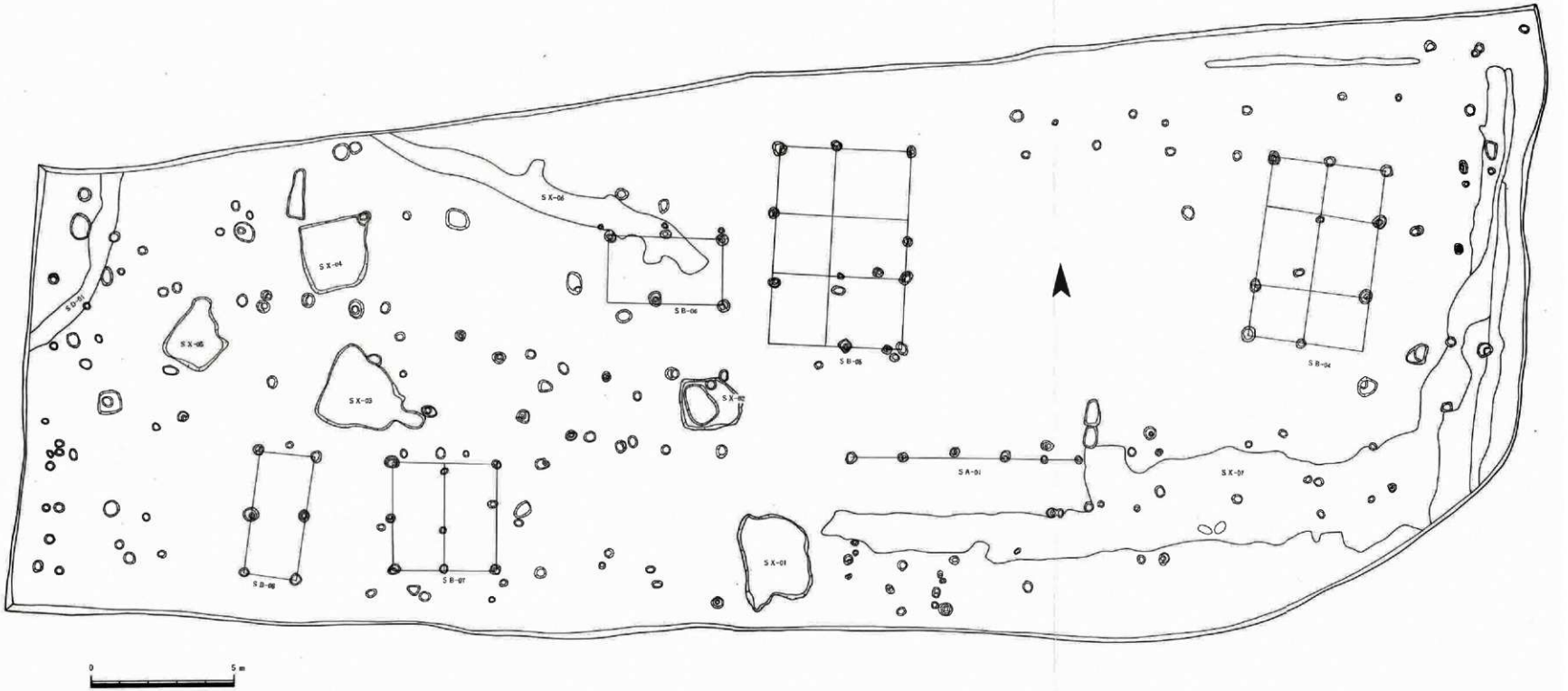


図4　T－5トレンチ遺構図

〔ＳＢ—04〕

Ｔ—５トレンチ東端で検出されたＮ—８°—Ｅの方位を保つ総柱の建物跡である。桁行３間（6.3m）、梁行２間（４m）を計る。掘り方は0.3m～0.5mの円形を基調としている。柱筋は全体的に通っていると言える。柱間は、桁行が北から1.8・2.7・1.8m、梁行が東から2.1・1.9mである。掘り方は小さいが総柱であることなど、倉庫であった可能性は高い。

〔ＳＢ—05〕

Ｔ—５トレンチのほぼ中央で検出されたＮ—３°—Ｅの方位を保つ総柱の建物である。桁行３間（6.7m）、梁行２間（4.6m）を計り、規模はＳＢ—04よりもわずかに大きい。掘り方は、ＳＢ—04と同一径で円形を基調としているが、楕円形を呈するものもある。柱筋はよく通っているとは言い難い。柱間は、桁行が北から2.3・2.3・2.1m、梁行が西から2.1・2.5mである。ＳＢ—04同様、倉庫となる可能性が高い。

〔ＳＢ—06〕

Ｔ—５トレンチ中央でＳＢ—05の西隣で検出されたＮ—91°—Ｅと、ほぼ東西に方位を保つ建物跡である。桁行２間（４m）、梁行１間（2.3m）を計る。掘り方は、0.3m～0.6mで円形を基調としている。柱筋は比較的通っており、柱間は桁行が東から2.0・2.0mと揃っている。

〔ＳＢ—07〕

Ｔ—５トレンチ南側で検出されたＮ—１°—Ｅの方位を保つ総柱の建物跡である。桁行・梁行ともに２間（3.7m）を計る。掘り方は、0.3m～0.5mで円形・楕円形を呈している。柱筋は比較的通っており、柱間は桁行が南から1.8・1.9m、梁行が西から1.9・1.8mである。

〔ＳＢ—08〕

Ｔ—５トレンチ南側でＳＢ—07の西隣で検出されたＮ—７°—Ｅの方位を保つ建物跡である。桁行２間（4.3m）、梁行１間（1.9m）を計る。掘り方は、0.4m～0.6mで円形を基調としている。柱筋はよく通っており、柱間は桁行が北から2.0・2.3mである。

２．柵跡

〔ＳＡ—01〕

Ｔ—５トレンチ南東部において５間分（8.1m）の柵跡が検出された。東西の方位を保ち、柱筋は１例を除いてよく通っている。掘り方は、0.2m～0.4mの円形を呈している。柱間は東から1.4・1.4・1.8・1.7・1.8mである。

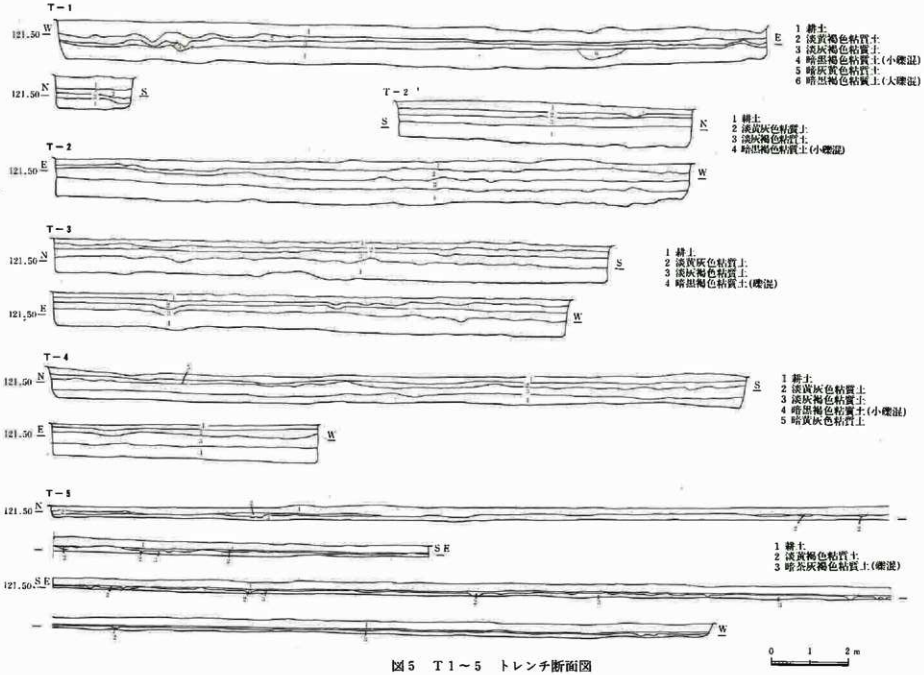


図5　T1～5　トレンチ断面図

3．その他

その他として性格不明の遺構について記すこととする。

〔ＳＸ—01〕～〔ＳＸ—05〕

Ｔ—５トレンチ中央から西側にかけて５つの性格不明な遺構を検出した。この遺構は、最大径3.7ｍ・最小径２ｍを計り、隅丸方形を基調としているが、全体的にかなり歪んでいる。各遺構によって層位に違いはあるが、基本的に淡灰茶色粘土・暗茶褐色粘質土(礫混)の２層が充填しており、部分的に淡黄褐色粘質土が入っており、各遺構とも約0.1～0.2ｍと浅い。また、出土遺物としては各々から多量の瓦が出土しているなど、瓦溜りであった可能性が高いと考えられる。

〔ＳＸ—06〕

Ｔ—５トレンチ北西部で検出された棒状遺構である。北西部がトレンチ外へ伸びるため全体の規模は不明であるが、検出された部分は最大幅1.5ｍ、長さ12ｍを計る。全体的に墨色を呈しており、材木などを焼いた跡ではないだろうか。

〔ＳＸ—07〕

Ｔ—５トレンチ東部で検出されたもので、幅0.5～３ｍ・長さ約37ｍの１字形の遺構である。全体的にたたきしめを施こしているかのように固くしまっており、淡灰白色を呈している。この遺構の東隣に柵跡が検出されており、道であった可能性を示唆している。

Ⅳ．出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物は、瓦類と土器類に大別されるが、土器類は量的に僅少である。また瓦類は出土遺物の大半を占め、出土場所もT－5トレンチ北西端及びSX－01～05に偏っている。

瓦

今回の出土遺物の大半を占める瓦類は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土し、前述したように出土地点も比較的偏っている。そして、いずれも白鳳時代にその製作年代を求めることができるものである。

軒丸瓦

軒丸瓦は数点のみの出土であるが、瓦当文様の形態などにより大きく2類に分類される。

A類（図1、2）は、単弁系の瓦でその出土数はわずか2点を数えるにすぎない。2点とも内区部分が欠損しているため全容は不明であるが、周縁に3重の重圏文が施こされており、①は彫りが深く、復元直径23.2cmを計る。胎土はやや不良で淡黄灰色を呈しており、焼成は堅緻である。②は復元直径20.6cmを計り、胎土・色調ともに①と同様であるが、焼成は硬質である。

B類（図3、4）は複弁系の瓦で、出土数はA類同様僅少である。③は内区部分がわずかに残存しているだけであるが、複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房径は6.8cmと大きい。胎土はやや不良で1～3mm大の砂粒を含み、色調は淡灰褐色、焼成はやや硬質である。④は③とは逆に外区だけが残っているものであるが、③同様複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。外区内縁に38個の珠文を配し、外縁は高く内方に傾斜し、線鋸歯文を施こす。胎土は③と同様であるが、色調は淡黄褐色を呈し、焼成は軟質である。

軒平瓦（図5～9）

軒平瓦は軒丸瓦同様出土数はわずかであるが、重弧文軒平瓦及び偏行唐草文軒平瓦が出土した。

重弧文軒平瓦は、いずれも四重弧文で、⑤は瓦当部より過半が残存し、無顎式で上弦幅29.8cm、下弦幅32cm、厚さ3.9cmを計る。平瓦凹面をヘラ削りし、凸面をナデている。色調は淡灰色を呈し焼成は堅緻で2mm前後の砂粒を含んでいる。⑥も⑤同様四重弧文で、左端が欠損しているため規模は不明である。無顎式で厚さ3.5cmを計り、平瓦凸面に2次叩きによる叩きじめが施こされている。色調は淡黄褐色を呈し、焼成はやや硬質で1～3mmの砂粒を含んでいる。

偏行唐草文軒平瓦も出土数はわずかで、⑦は印顎式で厚さ5.3cmを計り、上外区に鋸歯文を施こす。内区は左から右へ流れる偏行唐草文を配し、連続波状の茎から2本の支葉が派生し、いずれも支葉は茎から遊離し、末端が茎と平行する。ただ、2本の支葉に1本毎流れに逆行する支葉が施こされている。色調は淡黄褐色を呈し、焼成はやや硬質で1～3mmの砂粒を含む。⑧も内区・下外区の文

様・色調・焼成など⑦と同様である。⑨も内区・下外区文様は⑦⑧と同様であるが、色調は淡灰色を呈しており、胎土に2㎜程の砂粒を含んでいる。

丸瓦

丸瓦の出土数もさほど多いとは言い難いが、確認されるものはすべて行基式であった。その中で凸面の調整によりA～D類に分類することができる。

A類（図10）は格子叩きを施こし、それを擦り消したもので、凹面には布目が認められる。

B類（図11・12）は縄目叩きを施こし、それを擦り消したものである。

C類（図13）は凸面に縦位のハケ目を施こしたもので、凹面には布目が残存している。

D類（図14）は凸面を何らかの形で叩きしめたのち、丁寧に擦り消して叩きの痕跡を残さないものである。（ただし、摩滅のために判断できないものも含まれている。）

平瓦

瓦類は、前述したように今回出土した遺物の大部分を占めているが、その中でも平瓦が相当量出土している。これらは、凸面の調整の違いによりA類～D類に分類することができる。

A類（図15～24）は凸面を格子叩きにより調整するもので、格子の大きさなどによりAa 類からAc類に細分した。

Aa 類は、格子の数が5㎝内に9～10個以上認められるもので、⑮～⑲である。色調は淡黒灰色系と淡黄灰色系のものがあり、焼成はやや硬質で胎土に1㎜大の砂粒が含まれている。

Ab 類は、格子の数が5㎝以内に6～7個認められるもので、⑳～㉓である。色調は淡黄灰色系と淡黒灰色系のものに大別でき、焼成はやや硬質～硬質である。

Ac 類は、5㎝内に5個以下の格子が認められるものであるが、㉔は他の格子とは異なり単線も細く、叩きしめを施こした後に半擦り消しを行なっている。色調は淡黄灰色を呈し、焼成はやや硬質である。

B類（図25～28）は斜格子叩きを施こしたものである。㉕はほぼ完形に近い形で残存しており、前幅25㎝、厚さ2.4㎝を計る。凸面上半部に斜格子叩きがまばらに施こされており、下半部は擦り消されている。色調は淡黄灰色で、焼成はやや軟質である。㉖～㉘は凸面に緻密な斜格子叩きが施こされており、凹面は布目であるが、擦り消された痕が残る。色調は淡灰色～淡黄灰色を呈し、焼成はやや軟質～硬質である。

C類（図29～31）は縄目叩きにより調整するものである。全体的に縄目叩きが擦り消されているようで、必ずしも明確に残っているとは言えない。㉙は縄目叩きが同一方向を示さず、一部交差している。凹面はB類同様布目を擦り消す傾向にある。色調は淡灰色と淡黄灰色を呈し、焼成は㉙がやや軟質で、他は硬質である。

D類（図32～37）は前述したA～C類とは異なる叩きを有している。㉜㉝は平行叩き目にクロスを加えたような原体叩きが施こされており、㉜は叩きはまばらである。㉞㉟も叩き原体は㉜㉝とほぼ類似し

ているが、叩きしめの後カキ目が施こされている。また㉞については、カキ目を擦り消した痕がみられる。㉟は前述の叩き原体に平行目に直交するラインが加わり、平行目は13mm幅を計る。㊲は㊷～㉟と起きが異なり、平行叩きと格子叩きを組み合わせたような原体を呈している。また平行目は20mm幅を計り、㉟よりも広い。色調は㊲のみが淡黒灰色と異なり、他は淡黄灰色～淡茶灰色を呈している。

D類の叩きは、米原町塚原古墳(三大寺遺跡に関連する)の表土層より出土した平瓦に類例をみることができる。[1]

須恵器

無台杯身：㊸は杯身口縁部で復元口径16cmを計る。口縁部でやや外反し端部はやや尖り気味に収まる。体部内外面ともに回転ナデ調整である。㊹は底部外面に回転糸切痕が残る。

有台杯身：無台杯身同様、底部外面に回転糸切痕が残るもの（a）と、そうでないもの（b）に大別できる。（a）には㊵～㊺が該当し、ほとんど杯身底部である。外部は内外面ともに回転ナデ調整が施こされており、㊶は内面に自然釉が残る。（b）には㊺～㊷があてはまり、（a）同様底部である。調整も（a）と同様で㊶の内面にかなりの自然釉が残っている。また、㊷は比較的完品に近い形で残っていたものの一つで、底部からなだかに立ち上がり、口縁端部は比較的尖り気味に収まる。外部内外面ともに回転ナデ調整を施こし、底部内面に重ね焼きの痕が残る。高台は貼付で接地面にかなりのヘラ痕が認められる。

土師器

㊸は口径７cm、器高1.7cmを計り、平底で口縁部は内湾気味で端部はやや尖り気味に収まる。外面底部は粗雑ヨコナデ調整である。色調は明黄褐色であるが、底部外面は淡灰褐色を呈する。胎土は良好であるが、焼成はやや不良である。

縄文土器

縄文土器は、T－５トレンチ中央部東側から出土した。当初、遺構面上に口縁部の一部だけが露出していただけで、その多くは遺構面下からの出土である。この様な状況から下層遺構の可能性が出てきた為、断ち割りを行ったが、遺構は確認されず、また地山層においても遺物を検出することはできなかった。

この様な状況で出土した縄文土器は４点のみで、滋賀里Ⅲ式に相当する。

㊺は、高さ40.1cm、復元口径30cmを計り、「く」字形に外反する口縁部に、やや胴の張る体部がつく尖底の土器である。口縁部上端面に刻み目を施こす（滋賀里刻み目Ｂタイプ）。口縁部外面は水平ナデ調整が行なわれており、体部外面は下から上に削り調整が施こされている。また、口縁部外面にスス様の

ものが付着しており、煮沸に使用されたと考えられる。色調は褐色～黒褐色を呈している。

⑯は、高さ42.9cm、復元口径30cmを計る。形態は⑮に類似しているが⑮よりは胴が張り底部は凹底である。口縁部上端面に刻み目を入れている。体部外面上半部は削りの後ナデ調整を施こしているが、下半部は下→上への削り調整である。凹底部は凹面中央部に使用痕と思われる痕が認められる。色調は淡灰黄色を呈している。

⑰は、口縁部及び胴上半部のみであるが、どちらかというと⑮に類似してあまり胴が張らない。復元口径33.8cmを計り、口縁部上端面の刻み目はわずかに確認する程度である。口頸部外面付近は削りの後水平ナデ調整で、体部外面は下→上へ斜めの削りが施こされている。内面は口縁部・胴部とも丁寧に仕上げられている。色調は淡灰色褐色を呈している。

⑱は尖底部のみで、外面は下→上への削り調整が施こされている。また、底部外面にススけた痕があり、焼土と思われる塊りが付着しているのが確認された。

註① 田中勝弘「坂田郡米原町塚原古墳」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅷ－２。
滋賀県教育委員会、財滋賀県文化財保護協会、1980

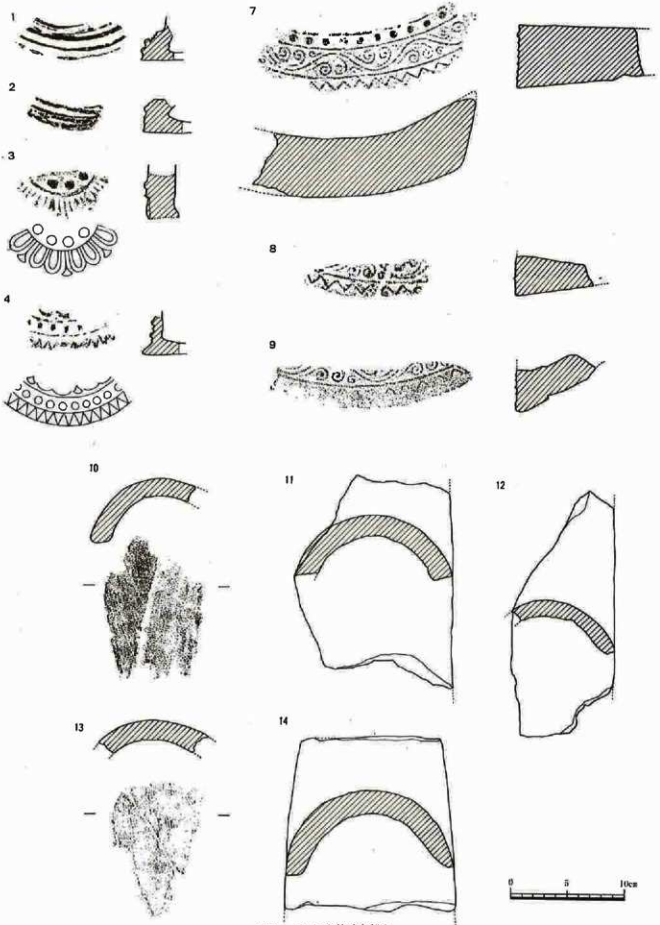


図6　出土遺物実測図

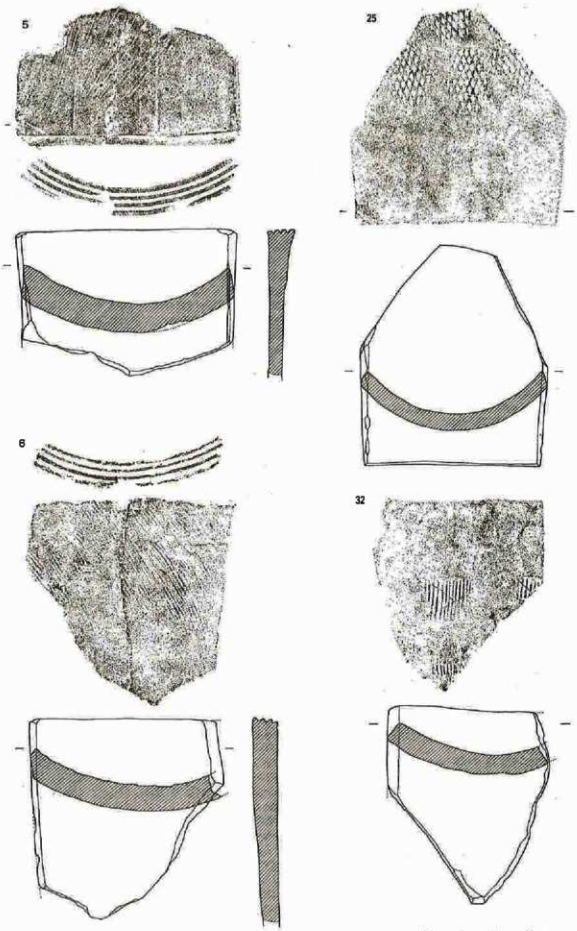


図7　出土遺物実測図

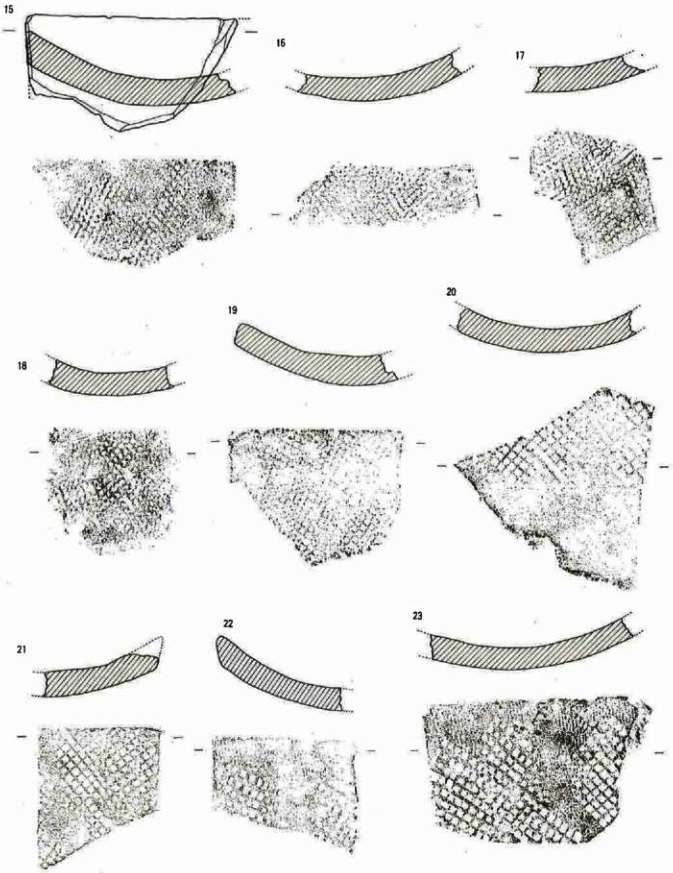


図８　出土遺物実測図

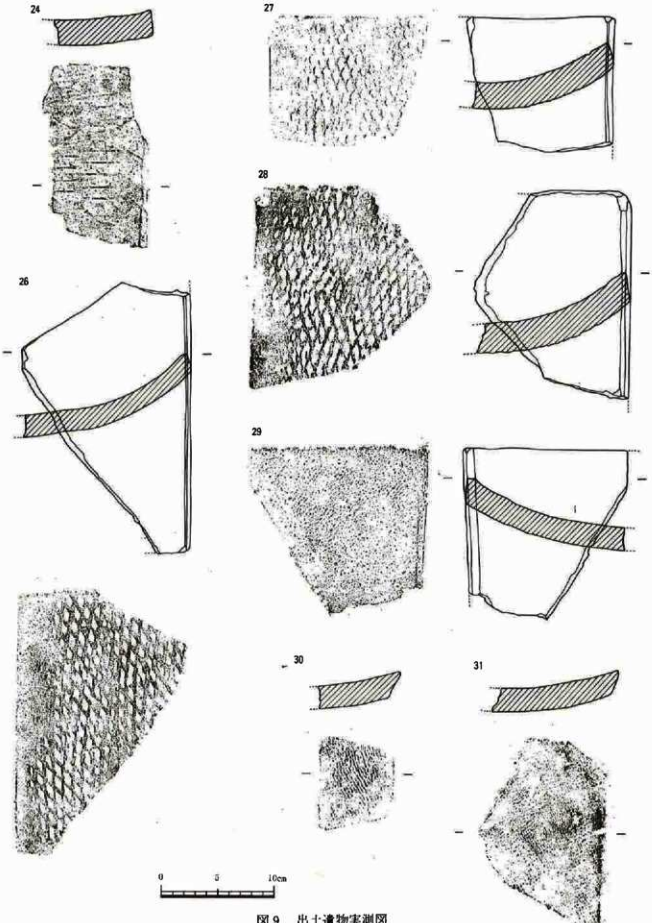


図9　出土遺物実測図

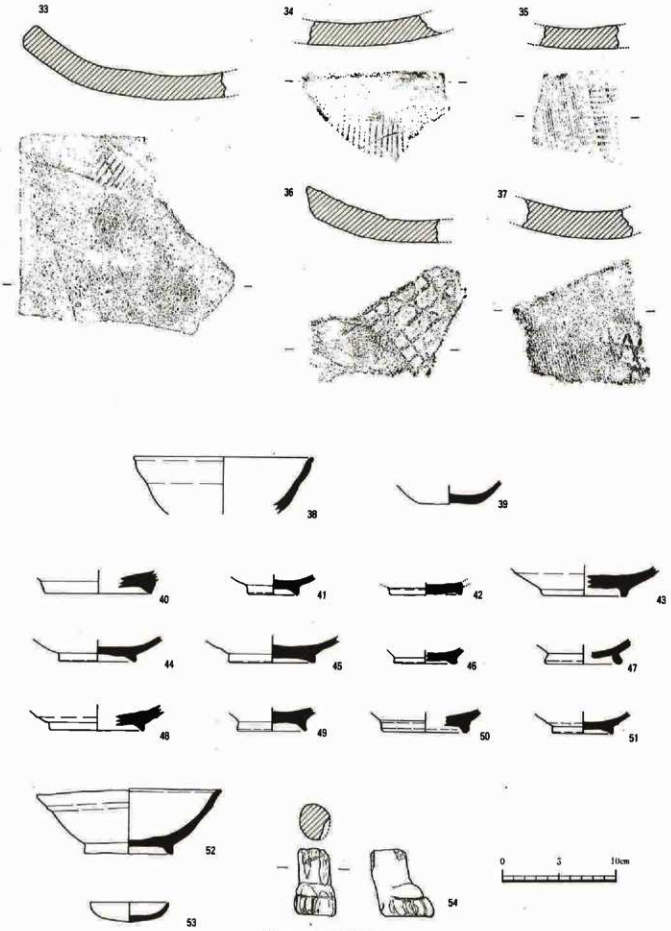

33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
0
5
10cm

図10　出土遺物実測図

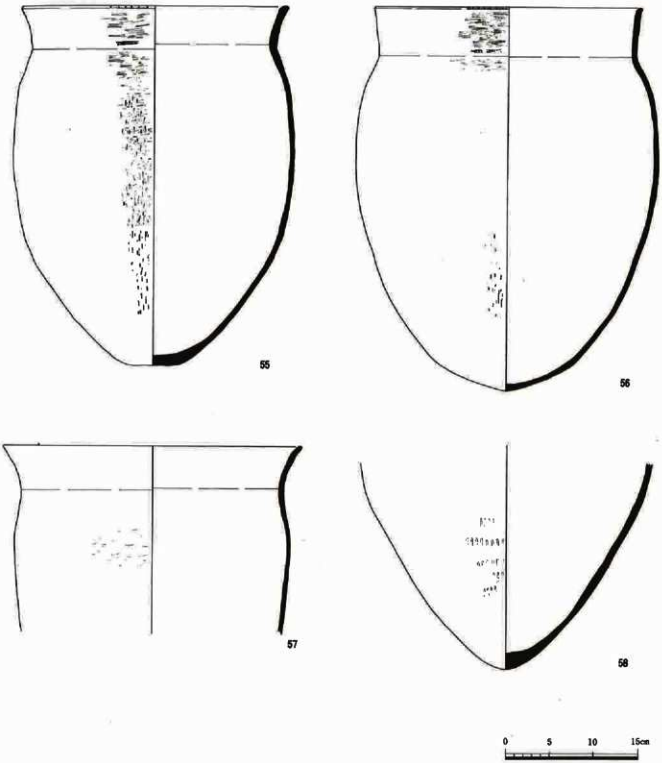


図11　出土遺物実測図

V. お わ り に

今回の調査の結果、掘立柱建物跡・瓦溜りの可能性を有する遺構・多量の瓦類・須恵器・土師器などが検出された。

しかし、多量の白鳳時代の瓦類が出土したにもかかわらず、直接瓦葺の建物を思わせる遺構の存在を確認することはできなかった。

したがって、建物の規模・形態などは不明であるが、使用されたであろう瓦類、特に軒瓦に関しては、単弁軒丸瓦と四重弧文軒平瓦や、湖北地方では米原町三大寺廃寺（醒井小学校々地）しか出土例のない複弁八葉蓮華文軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦が出土し、これらは各々セット関係を有するものと考えられる。また、平瓦についても凸面に格子・斜格子叩きをもつものが大部分を占め、特異な叩き原体の平瓦D類も三大寺廃寺にその同笵を求めることができる。

以上のように、奈良時代と考えられる瓦類が出土していないことから、8世紀前半以降には法泉寺跡においては造営などが行なわれていなかったことを示唆するものであり、三大寺廃寺と同系統の瓦類が出土していることなどから、法泉寺跡は7世紀第4四半期に造営が開始され、おそくとも8世紀前半には廃絶したのではないかと考えられる。

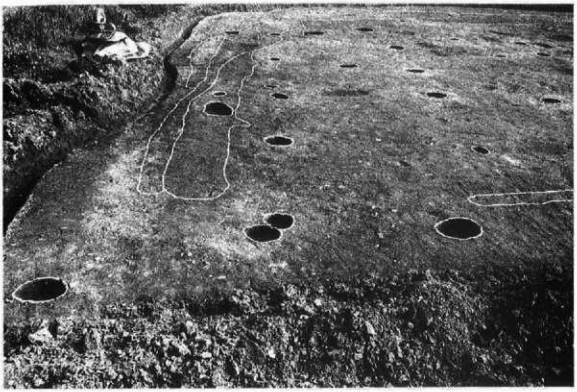
また、関連する遺構が確認できなかった為、瓦葺建物の位置についても明らかではないが、瓦類の出土地点が偏っており、瓦溜りと思われる遺構の存在などから、今回の調査地域に近いのではないかと考えられる。

掘立柱建物跡については、その方位などから大きく3群に分かれるものであるが、柱穴内などの出土遺物から8世紀後半から9世紀前半以降の時期に形成された集落と考えられる。また、建物跡の柱穴内から瓦類片が出土しており、これらが意図的に柱を固定或いは支える為に使用されたのではないだろうか。つまり、瓦葺の建物が消滅した後、今回検出された掘立柱建物に瓦を再利用したのではないかと考えられる。

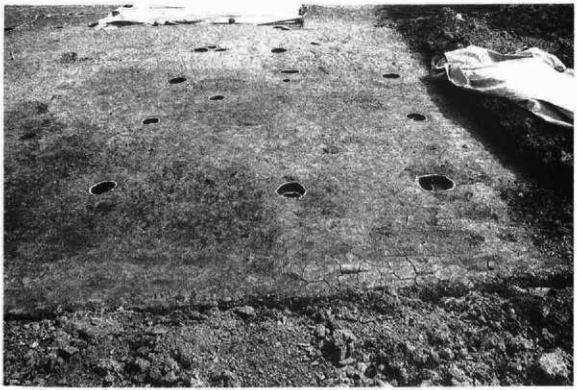
したがって、法泉寺遺跡は、7世紀第4四半期に造営が始まり、8世紀前半頃に廃絶したのち、集落が形成されたのであろう。

調査地遠景

T－3トレンチ（北から）



T－5トレンチ（北から）

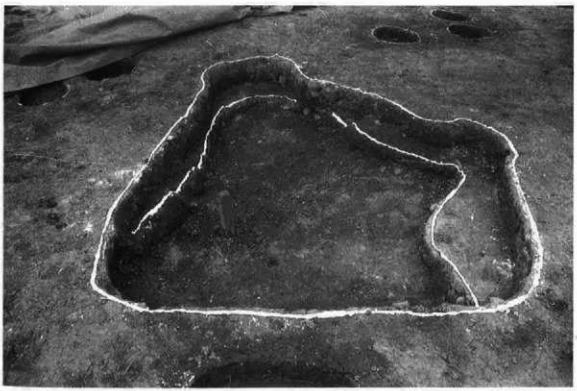


T－5トレンチ（北から）

T－5トレンチ遺物出土状況

T－5トレンチ遺物出土状況

T－5トレンチ遺物出土状況



T－5トレンチ　SX－05

1

2

3

4

5

6

7

8

9

12

10

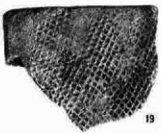
13

14

11

出土遺物

15


19

16

18

17

24

20

23

22

21

25

26

28

27

出土遺物

29

31

30

32

33

35

34

37

36

出土遺物

38

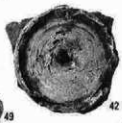
39

46

47

40

48


42

51

41

49

50

43

44

45

52

53

54

55

56

57

58

出土遺物

２．坂田郡山東町小倉山遺跡
しょうけ塚遺跡

Ⅰ．は　じ　め　に

本報告は、県営ほ場整備事業に伴う小倉山遺跡・しょうけ塚遺跡の埋蔵文化財発掘調査にかかるものである。

小倉山遺跡・しょうけ塚遺跡は、山東町の西部大字山室地先に所在し、従来から周知されていた遺跡である。

昭和61年、滋賀県農林部より県営ほ場整備事業について、埋蔵文化財の有無について照合がなされ、また、滋賀県教育委員会からの調査依頼により、同年10月より山東町教育委員会が試掘調査を実施した。今回の試掘調査は、ほ場整備事業が小倉山遺跡・しょうけ塚遺跡内に周知されている低小丘を現存するという観点から、周辺における排水路及び田面についての試掘調査である。

その結果、いくつかの試掘トレンチにおいて、柱跡と思われる遺構が検出された。この結果にもとずき、昭和61年10月21日より同年11月５日まで、排水路部分約300㎡（他：設計変更約1,200㎡）の発掘調査を実施し、以後は出土資料の整理調査を行なった。調査は試掘同様、山東町教育委員会が実施した。

Ⅱ．位　置　と　環　境

今回の調査地は、坂田郡山東町山室地先に所在している。この地は山東町西部端に位置しており、両遺跡が周知されている低小丘以外の地目は、そのほとんどが水田であった。

今回の調査地が立地する山東町西部端は、東に黒田川が南流し、西及び南は近江町との境をなす横山丘陵が連なっている。その横山丘陵から突出する小丘陵先端部に両遺跡として周知されている低小丘が立地するのである。

小倉山遺跡・しょうけ塚遺跡の両遺跡ともに、以前から周知されていたもので、しょうけ塚遺跡について『坂田郡志』には

『土俗「しょう塚」と称す。「しょうけ」と称する籠を伏せたるに似たれば其の名を得たりという。

（中略）一説に「しょうけ塚」は〔庄家塚〕にて庄司の墳墓なりとも伝えたり。』

と記載されている。

また、小倉山遺跡は、同一の低小丘に古墳と寺院跡が重復して周知されており、寺院跡について前掲同誌には

『天台にして、小倉寺浄泉坊と称す。今、田圃の間にある小丘上に毘沙門堂あり。小倉寺の本尊なり

と云う。九坊の跡存す。』

と書かれており、小倉山中腹に毘沙門堂が現存している。

今回はこれら両低小丘を現状保存し、周辺排水路のみの調査とした。文献・伝承と関連付けられる調査が期待される。

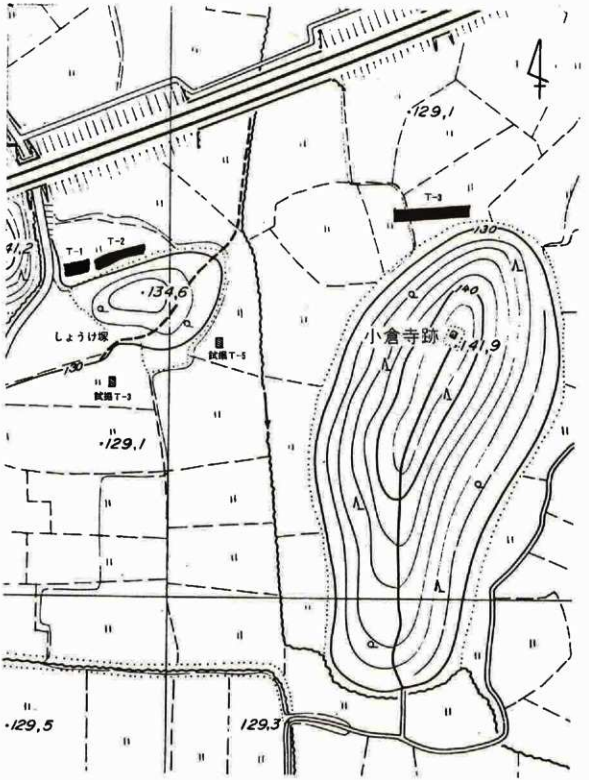

T-1
T-2
T-3
T-4
T-5
T-6
134.6
129.1
129.5
129.3
141.9
130
140
しょうけ塚
小倉寺跡
試掘T-5
試掘T-3

図12．トレンチ設定図

0
5
100m

Ⅲ．調査の結果

試掘の結果にもとずいて、小倉山遺跡・しょうけ塚遺跡北側の排水路計画部分に、T－1～T－3トレンチを設定した。各トレンチ設定後、バックホウによって遺構が確認された層まで掘削を行なった。

1．層位と遺構

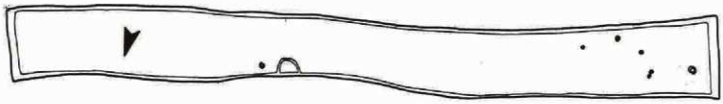
まず層位についてみると、西部に位置するT－1・T－2トレンチと東部に位置するT－3トレンチでは、色調・土質などやや様相を異にする。T－1・T－2トレンチでは、基本的な層序は2～3層を呈しており、T－1トレンチでは、耕作土と明黄灰色粘土層が基本層序を形成しているが西側ではやや青色を帯びた層が混入する。また、他のトレンチに比べかなり複雑多岐にわたっている。T－2トレンチでは、淡茶灰色粘質土層である耕作土を除くと、0.2m前後の淡灰茶色粘質土がほぼ平行に堆積している。第3層としては、灰茶色粘土層と明黄灰色粘土層が交互に入り組んでいる。東部に位置するT－3トレンチは、全体的に平行堆積といえるが、前述のようにT－1・T－2トレンチに比して色調などの様相が異なる。基本的に耕作土の淡茶赤色粘質土層、第2層として黒灰色粘質土層、第3層として淡黒灰色粘質土層が基本層序であり、全体的に赤黒い色調を呈している。

また、遺構としては、T－2トレンチにおいて柱跡数穴、墨跡1ヶ所を検出することができた。柱跡はトレンチ西端部に偏っており、掘り方0.2～0.4mを計り、円形及び楕円形を呈している。また、墨跡はトレンチのほぼ中央部北側で検出されている。遺構がトレンチ外へも伸びるため規模等は不明であるが、掘り方は東西1.1m、南北0.6m以上を計り、方形ないし楕円形を呈している。墨以外に遺構等は検出できず、また焼土も確認することはできなかった。

2．出土遺物

出土遺物は、前述したように発掘調査を行なった排水路部分からはほとんど検出できなかったが、事前に行なった試掘調査により出土した遺物について一括して掲載することとする。主として遺物が出土したのは、試掘トレンチT－3・T－5で、ちょうどしょうけ塚を囲むような形に位置している。基本的な層序はいずれも第Ⅰ層淡茶灰色粘質土層（耕作土）・第Ⅱ層淡黄灰色粘土層・第Ⅲ層黒褐（黒褐）色粘土層となっており、この第Ⅲ層に多くの遺物が包含されていた。特に多量に出土したのは、しょう塚南側に設定した試掘トレンチT－5で、遺物は第Ⅲ層でも南端の砂礫が混入した地点に集中していた。出土遺物は古墳時代前期を中心としていると考えられるが、かなり摩耗していた点が危惧される。

①②はやや屈曲の甘い受け口状口縁を有するもので、①は復元口径22.4cmを計り、口縁端部に刺突列点文を施こし、肩部以下にはハケ目と刺突文を配している。色調は黒赤褐色を呈する。②も同様で復元



T－2トレンチ遺構図

0　5 m

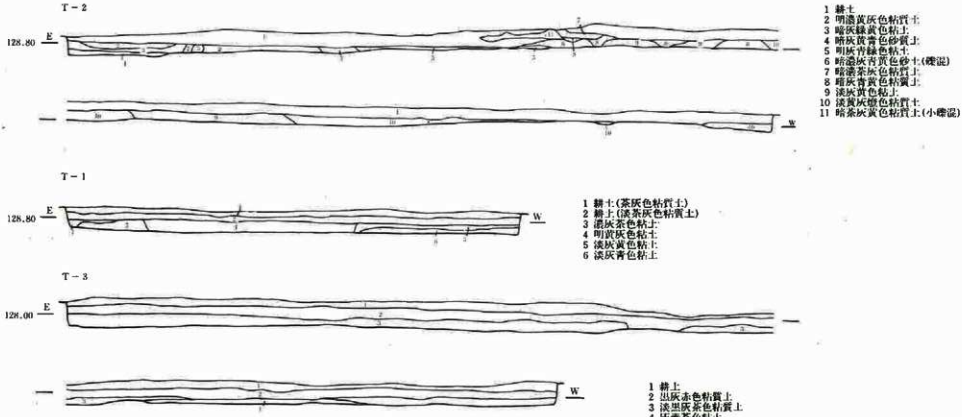


図13　T－2トレンチ遺構図及びT－1～3トレンチ断面図

0　3 m

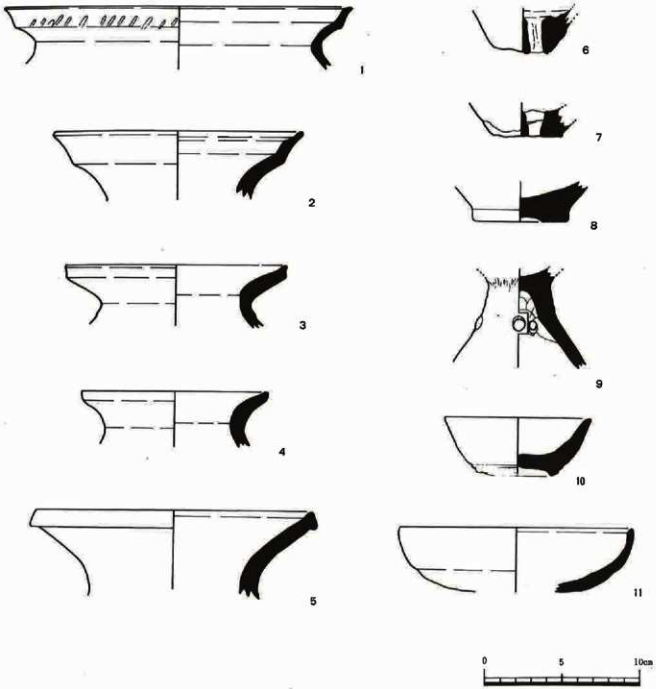


図14　出土遺物実測図

口径16cmを計り、口縁端部内面に２条の浅い沈線を施こす。色調は淡茶灰色を呈する。③は復元口径14.2cmを計り、大きく「く」の字状に口縁部がつく。端部は肥厚である。頸部付近に櫛描文を施こした後、ナデ消している。色調は淡赤褐色を呈する。④も③同様、復元口径12cmを計る。口縁部内面にうすく櫛状横線文を施こす。色調は淡黄灰色を呈している。⑤は復元口径17.8cmを計り、大きく外反する口縁部で、端部は外方へつまみ出されており、肥厚である。外面はヘラ削りが施こされ、内面は丁寧に仕上げられている。色調は淡茶灰色を呈しており、胎土はやや不良である。⑥⑦は底部に孔を穿つ所謂、底部穿孔土器で、⑦の底部内面は粗雑なヘラ削りが施こされている。色調は淡茶灰色系を呈しており、胎土・焼成ともに良好である。⑧は底部が凹状を有するもので、かなり肥厚である。色調は茶灰白色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。高杯⑨は大きくハの字に開く脚柱部で、スカシ孔が３孔穿たれている。脚柱部外面は、粗雑なタテのヘラ削りを施こし、面取りされている。色調は淡赤褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。⑩⑪は須恵器杯身で、⑩は底部端に凹状の高台を貼付する。内外面ともに回転ナデ調整を施こす。

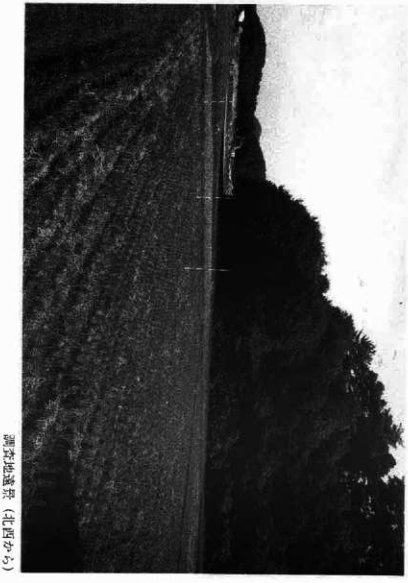
Ⅳ．お　わ　り　に

今回は、排水路部分のみの調査であり、面積的にも僅少で、遺構としてはわずかな柱穴跡と墨を検出したのみであった。遺物についても前述したように排水路部分からは出土しなかった。しかし、事前に行なった試掘調査においては、包含層から古式土師器を中心とした多量の土器が出土した。これら出土土器中には、古式土師器の他に有台杯身須恵器片も含まれており、古墳時代前半を中心とした時期と７世紀後半を中心とした時期に２分されると考えられる。

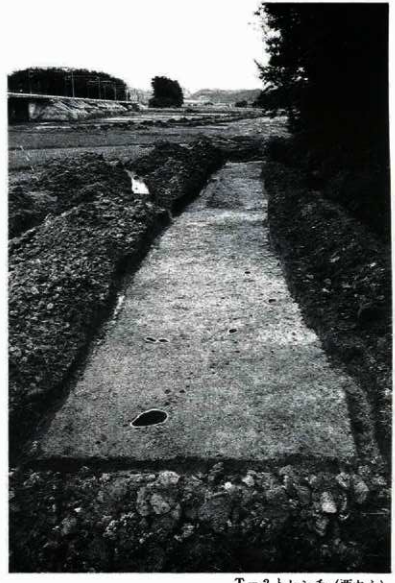
この２時期を層序との関係においてみると、古式土師器を多量に出土したのは、しょうけ塚南に設定した試掘トレンチＴ－５第Ⅲ層の黒褐色粘土層であるが、特にトレンチ南端の砂礫が混入していた地点に集中しており、出土土器も摩耗しているものが大半を占めていた。一方須恵器片は、しょうけ塚南側に設定した試掘トレンチＴ－３第Ⅲ層の黒褐色粘土層に多く包含されている。これらのことから古式土師器については、流れ込んだ可能性を示唆するものであり、須恵器は破棄されたものではないだろうか。

今回の調査では、小倉山遺跡、しょうけ塚遺跡とも墳丘と考えられる部分については、現状保存という形で調査を行なっておらず、出土遺物から時代を確定することは困難と言わざるを得ない。しかし、今回流れ込んだ可能性はあるが、町内では出土例のない時期の土器が検出されたことで、今後の周辺遺跡調査及び研究にとって期待できるものと考える。

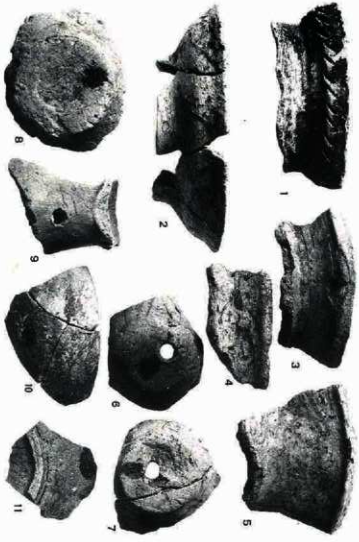
T－1トレンチ（西から）



調査地遠景（北西から）



T－2トレンチ（西から）



出土遺物